

女子中学生の仲間関係のプロフィールと ストレスとの関連について

目白大学人間社会学部 黒沢 幸子
KIDS カウンセリングシステム 有本 和晃
東京大学大学院医学系研究科 森 俊夫

【要 約】

本研究は、女子中学生の仲間関係のプロフィールとストレス反応や学校ストレッサー、ソーシャルサポート（友人）との関連について検討し、彼女のストレス緩衝要因について示唆を得ることを目的とした。都内私立女子中学校4校において質問紙調査を実施し、1～3年までの1419名のデータを分析対象とした。分析の結果、仲間関係のなかで不安を感じているだけよりも、仲間への親密さ・同質性への欲求や、異質性への希求を併せ持っているほうが、学校生活でより多くのストレスを感じており、ストレス反応も押しなべて高くなっていることが示された。また、仲間関係の不安をあまり感じず、親密さを意識している者は、友人からのソーシャルサポート感が高くなる傾向にあることが見出された。女子中学生へのより適切な心理教育的援助サービスを考えるうえで、仲間関係における同調圧力や不安の軽減、温かく一体感のある仲間関係の醸成という視点が重要であることが示唆された。

キーワード：女子中学生、仲間関係、ストレス反応、ソーシャルサポート

問題と目的

児童・生徒の不登校やいじめ、暴力行為などが久しく社会問題となり続け、子どもたちの心理的発達とメンタルヘルスの問題は多岐にわたり、その実態や要因についてさまざまな研究が進められてきている。子どもたちの生活実態の変化、家庭教育機能の低下、学校ストレスや友人関係の問題などがその背景にあることが指摘されてきている。特に友人関係は、中学生の心理的な状況やメンタルヘルスを左右する重要な要因であり、親友の有無が学校不適応の防御要因として働く（Stocker, 1994；Wasserstein & LaGreca, 1996）という報告や、「友人」は、学校でのストレス要因としても、そのストレス要因を緩衝するとされるソーシャルサポート感のサポート源としても、重要な因子となっている

という報告がなされている（岡安・嶋田・坂野, 1993；加藤・栗田, 1999；岡安・高山, 2000；高山, 2000；岡田, 2002；廣岡・森田, 2002）。

筆者らはとくに子どもたちの仲間関係と心理的発達の特徴に注目し、「仲間関係発達尺度」を開発し研究を進めてきた（黒沢・有本・森, 2003；黒沢・森・寺崎ほか, 2003；黒沢・有本・斉藤ほか, 2004）。筆者らの「仲間関係発達尺度」は、児童期から思春期の仲間関係の発達について測定するもので、＜ギャング・チャム＞＜ピア・プレッシャー＞＜ピア＞の3下位尺度から構成される尺度である。当初筆者らは、保坂（1996）の概念仮説を参照して、「ギャング・グループ」（gang-group）；同一行動による一体感を特徴とする児童期後半同性同輩集団、「チャム・グループ」（chum-group）；同一言語による一体感の確認を特徴とする思春期前半の

同性同輩集団、「ピア・グループ」(peer-group)；自立した個人として尊重し合い、異質性を認めることが特徴の思春期後半以降の性別年齢混合可能集団、という3グループの発達段階を想定していたが、抽出された3因子は、保坂(1996)が提唱した発達段階を踏襲せず、「ギャング」と「チャム」の項目は、混ざり合った形で<ギャング・チャム>と名づけられた1因子を構成し、それとは別に<ピア・プレッシャー>と名づけられる因子が独立して抽出された。子どもたちの仲間関係の発達段階において、自立が達成されていく過程で<ギャング・チャム>と<ピア・プレッシャー>、つまり「親密さ」と「同調圧力」は、並存し表裏をなす性質のものであり、<ピア>に移行するなかで自立が達成されていくことが示唆され、なかでも<ピア・プレッシャー>因子は、臨床的にも有用であると考えられた。

さらに中学生の学年別・性別の基準値を横断的調査により算定したが、その結果仲間関係発達の様相に性差があることが認められた(黒沢・森・寺崎ほか, 2003)。加えて、中学生の仲間関係及び心理的な発達について、今まで取り組まれていなかった縦断的研究を行った結果、中学生の仲間関係は<ギャング・チャム>や<ピア・プレッシャー>の割合は3年間では大きな増減傾向は見られず、その一方で<ピア>の占める割合が増え、仲間関係の新たな段階へと移行することが示唆され、これは横断的なデータによる先行研究の傾向とほぼ一致した。また性差についての検討から、女子において友人の存在が支えになる一方で、同調圧力を敏感に感じ友人との距離を置けないのに対し、男子は友人からのサポート感は低いと同調圧力も低く、比較的距離を置いてアイデンティティに落ち着きを見せるという構図が浮かんだ。仲間関係からは、抑うつ感情を含めた各ストレス反応について、仲間関係が重要な要因となることが示唆され、ストレス反応は女子のほうが出現しやすく、仲間からの影響も大きいという特に女子のメンタルヘルスを考える上で重要な示唆がもたらされた。中学生へのより適切な心理教育的援助サービスを考えるうえで学年や性別を考慮する重要性が示唆された(黒沢・

有本・斉藤ほか, 2004)。

筆者らの研究だけでなく、思春期周辺年齢の友人関係や仲間集団における性差について言及している研究は少なくない。榎本(1999)は、青年期の友人関係について、男子は友人と遊ぶ関係から互いを尊重する関係と変化するのに対し、女子は友人との類似性に重点を置いた関係から他者を入れない閉鎖的な関係を経て互いを尊重する関係へと変化することを示している。伊藤の学級風土研究(伊藤, 2001, 2003)においても、男女の差が大きく生じることが報告され、男女の差異を考慮した学級指導の必要性が強調されている。また、廣岡・森田(2002)の中学1、2年生を対象とした研究では「女子は男子と比較して友人関係を含めた対人関係について特にストレスを感じやすい」としている。

加えて社会的事件に目を転じれば、2004年6月上旬に、小学6年生女児がその同級生女児を校内で殺害するという日本の学校教育史において前代未聞の事件(通称：佐世保小6同級生殺害事件)が発生し、学校関係者、子どもをもつ親たち、また日本社会全体が大きな衝撃を受けることになった。学校教育の現場で、日常仲が良かったとされるわずか12歳前後(思春期周辺年齢)の女児同士の間で生じたこの事件は、今までの暗黙の常識を覆すものとなった。この事件を契機にとくに沸騰した議論は、思春期の女子の仲間関係や心の発達に何が起きているのか、そこにどのようなストレスがあるのかというものであった(たとえば黒沢, 2004a, 2004b)。

筆者らの「仲間関係発達尺度」を用いた研究(黒沢・有本・森, 2003)では、<ギャング・チャム>、<ピア・プレッシャー>、<ピア>の各下位尺度の、小学5年生から高校3年生までの8学年の学年別平均得点の推移を比較したところ、<ピア・プレッシャー>は小学6年時でピークとなるという結果が得られた。この結果は、本事件が示唆した小6の仲良しの友人関係における否定的な力関係(圧力)の存在と、奇しくも一致するものとなった。しかしながら、この研究では性差についての分析はなされておらず、それがとくに女子に顕著なものであるかについては明らかにされていない。

以上のことから、思春期（周辺年齢）のとくに女子の仲間関係やストレスについて、より詳細な知見を実証的研究により積み重ねることは、子どもたちの成長発達を支援し、適切な心理教育的援助サービスを構築していくうえで、重要なことと考えられる。子どもたちの仲間関係を見る際、既に筆者らが用いている＜ピア・プレッシャー＞をはじめとした仲間関係のプロフィール（ギャング・チャム・ピアの割合）という観点から、メンタルヘルスを理解することは臨床上有用であると考えられる。「仲間関係発達尺度」を用いた研究（黒沢，有本，森 2003；黒沢・森・寺崎ほか 2003）から、仲間関係はギャング・グループからチャム・グループさらにはピア・グループと段階的に変化・移行していくのではなく、これらの特性を併せ持ちながら徐々にその割合が変化していくことが見出されており、さらに子どもたちが自分らしさ（アイデンティティ）を確立していく課題とも仲間関係は影響し合っていることが示唆されている。

筆者らは、この「仲間関係発達尺度」、および学校ストレス要因に関する3尺度からなる「学校生活調査（短縮版）」（岡安・高山，1999）他、複数の尺度を組み合わせた「スクールライフ・アンケート」と名づけられた質問紙調査を、現在、複数の公立や私立の中学校において、包括的生徒理解と学級・学年が持つニーズ査定を目的に実施してきている。「スクールライフ・アンケート」は、既に筆者らが開発してきた「スクールカウンセリングシステム構築のための包括的ニーズ評価尺度 CAN-SCS」の教師版（黒沢・森・有本ほか，2001）、保護者版（黒沢・森・有本ほか，2002）に対する生徒版としても位置付けられている。

そこで、本研究では、複数の私立女子中学校において実施された「スクールライフ・アンケート」の調査結果を用いて、女子中学生の仲間関係のプロフィールを詳細に分類したうえで、それらとストレス反応、学校ストレス、友人からのソーシャルサポートとの関係を分析し、その特徴を明らかにするとともに、どのような要因が女子中学生のストレス緩衝要因となるのかについて示唆を得ることを目的とする。

方法

1. 対象および調査方法

東京都内の私立女子中高一貫校4校を対象に、2001年11月から翌年3月にかけて質問紙調査を実施した。質問紙はクラス単位で実施し、配布と回収を行った。今回分析の対象となったのは、中学1年生418名、中学2年生489名、中学3年生512名、計1419名である。

2. 質問紙の構成

質問紙は以下の5尺度から構成される。

①仲間関係発達尺度（15項目版）：黒沢・有本・森（2003）が作成した尺度（試作版：18項目）を元に、その後の調査結果から3項目を除外した15項目版を新たに作成した。その信頼性と妥当性は既に報告されている（黒沢・森・寺崎ほか，2003）。行動と言語の同一性を示す＜ギャング・チャム＞、個人の尊重と異質性の受容を示す＜ピア＞、仲間集団への同調圧力を示す＜ピア・プレッシャー＞の3つの下位尺度からなり、回答者はそれぞれの項目について、「そう思う」から「思わない」までの4段階で評価し（分析する際に3 - 0に得点化）、点数が高いほど、各仲間関係段階の特徴が強いことを示す。

②ストレス反応尺度（短縮版）：岡安・高山（1999）が作成した尺度で、その信頼性と妥当性は既に報告されている。「頭が痛い」、「眠れない」、「いらいらする」、「悲しい」といった16項目に対し、「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の4件法で評価する。＜身体症状＞＜抑うつ・不安＞＜不機嫌・怒り＞＜無力感＞の4つの下位尺度それぞれで、点数が高いほど各ストレス反応の程度が強いことを示す。

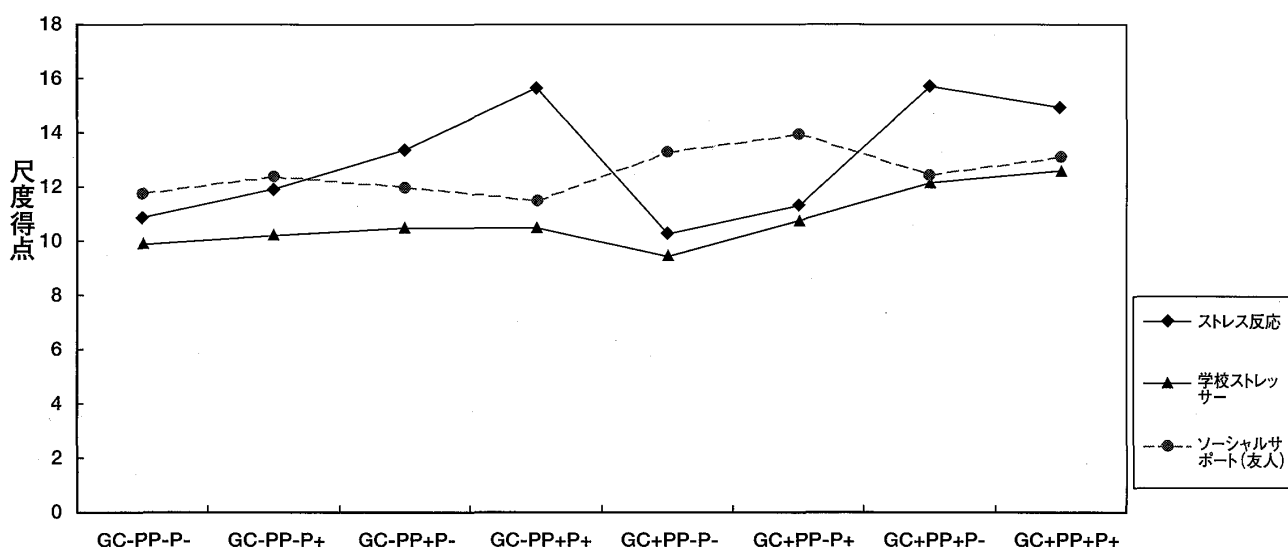
③学校ストレス尺度（短縮版）：岡安・高山（1999）が作成した尺度で、その信頼性と妥当性は既に報告されている。「先生が自分を理解してくれない」、「クラスの友だちから、仲間はずれにされた」といった12項目に対し、「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の4件法で評価する。＜教員との関係＞＜友人関係＞＜学業関連＞の3つの下位尺度それぞれで、点数が高いほど各ストレス

TABLE 1 仲間関係、ストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポート（友人）各尺度間の相関

	ピア・プレッシャー	ピア	ストレス 反応	学校ストレッサー	ソーシャル サポート(友人)
ギャング・チャム	0.505 **	0.085 **	0.095 **	0.137 **	0.248 **
ピア・プレッシャー		0.007	0.226 **	0.152 **	-0.034
ピア			0.016	0.047	0.158 **
ストレス反応				0.517 **	-0.245 **
学校ストレッサー					-0.168 **

** p < 0.01

FIGURE 1 仲間関係のプロフィールとストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポート(友人)の尺度得点



からのストレスが強いことを示す。

④ソーシャルサポート感尺度（短縮版）：岡安・高山（1999）が作成した尺度で、その信頼性と妥当性は既に報告されている。「あなたに元気がないと、すぐに気づいて、はげましてくれる」、「あなたが何か悩んでいると知ったら、どうしたらよいか教えてくれる」、といった4つの質問に対し、＜父親＞＜母親＞＜兄弟＞＜担任＞＜友人＞等といった各サポート源からどの程度ソーシャルサポート感を得ているかを、4件法で評価する。点数が高いほど、各サポート源からのソーシャルサポート感が強いことを示す。

以上4尺度のほか、対象者全員に基本属性（性別、学年、年齢）を尋ねた。

3. 分析方法

仲間関係とストレスの関連を検討するため、各尺度間のピアソンの相関係数を算出した。さ

らに、仲間関係のプロフィールとストレス反応や学校ストレッサー、ソーシャルサポート（友人）との関連を検討するために＜ギャング・チャム＞、＜ピア・プレッシャー＞、＜ピア＞それぞれの下位尺度得点を、その平均点を境に低群・高群の2群に分け、2×2×2の8グループに群分けし、ストレス反応や学校ストレッサー、ソーシャルサポートの尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った。なお、本研究では、生徒の友達関係について検討することを目的としているため、ソーシャルサポートについては＜友人＞のみを用いた。ストレス反応および学校ストレッサーについては全項目の合計得点をそれぞれの尺度得点とした。統計解析にはSPSS for Windows 11.0Jを用いた。

結果

1. 各尺度間の相関について

仲間関係発達尺度の3下位尺度、ストレス反

TABLE 2 仲間関係の各プロフィールとストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポート(友人)との分散分析

ギャング・チャム (GC)	低 (GC -)								高 (GC +)								F 値 多重比較	
ピア・プレッシャー (PP)	低 (PP -)				高 (PP +)				低 (PP -)				高 (PP +)					
ピア (P)	低 (P -)		高 (P +)		低 (P -)		高 (P +)		低 (P -)		高 (P +)		低 (P -)		高 (P +)			
グループ	GC-PP-P. ^a		GC-PP-P+ ^b		GC-PP+P. ^c		GC-PP+P+ ^d		GC+PP-P. ^e		GC+PP-P+ ^f		GC+PP+P. ^g		GC+PP+P+ ^h			
N	225		190		80		75		122		155		230		217			
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
ストレス反応	1091	(8.94)	1192	(9.98)	1339	(9.73)	1569	(10.82)	1028	(7.27)	1131	(8.14)	1570	(9.39)	1497	(10.15)	9.24 ** d>aef; g>abef; h>abef	
ストレッサー	989	(6.29)	1023	(6.79)	1049	(6.20)	1049	(6.58)	946	(5.71)	1079	(6.35)	1218	(6.87)	1261	(6.68)	5.34 ** g>abe; h>abe	
ソーシャルサポート (友人)	11.77	(3.18)	12.42	(3.18)	12.00	(2.93)	11.49	(2.67)	13.29	(2.52)	13.97	(2.18)	12.44	(2.77)	13.09	(2.70)	12.59 ** e>acd; f>abcdg; h>ad	

** p < 0.01

応得点、学校ストレッサー、ソーシャルサポート(友人)、それぞれの間における Pearson の積率相関係数を TABLE 1 に示す。＜ギャング・チャム＞と＜ピア・プレッシャー＞間で $r = 0.505$ ($p < 0.01$)、＜ストレス反応＞と＜学校ストレッサー＞間で $r = 0.517$ ($p < 0.01$) と中等度の相関が見られた。＜ストレス反応＞と＜ピア・プレッシャー＞間では $r = 0.226$ ($p < 0.01$)、＜ソーシャルサポート(友人)＞と＜ギャング・チャム＞間では $r = 0.248$ ($p < 0.01$)、＜ストレス反応＞間では $r = -0.245$ ($p < 0.01$) という一定の有意な相関が示された。

2. 仲間関係のプロフィール別の一元配置分散分析

仲間関係発達尺度の下位尺度＜ギャング・チャム＞、＜ピア・プレッシャー＞、＜ピア＞の各得点を、その平均点を境に低群(－)・高群(＋)の2群に分け、 $2 \times 2 \times 2$ の8グループに群分けして、8群により構成される仲間関係のプロフィールを作成した。その後8群それぞれの＜ストレス反応＞や＜学校ストレッサー＞、＜ソーシャルサポート(友人)＞の尺度得点の平均を算出し (FIGURE 1)、さらにそれらを従属変数とした一元配置分散分析を行った (TABLE 2)。

結果、ストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポート(友人)すべてにおいて有意差が見られた ($F(7,1276)=9.24$, $F(7,1267)=5.34$, $F(7,1311)=12.59$; $p < 0.01$)。多重比較検定 (Tukey の HSD) を行ったところ、＜ストレス

反応＞では＜ピア・プレッシャー＞が高い群 (PP +) が他の群に比べ得点が高いという傾向が示された ($d > a, e, f$; $g > a, b, e, f$; $h > a, b, e, f$; $p < 0.01$)。＜学校ストレッサー＞では＜ギャング・チャム＞と＜ピア・プレッシャー＞がともに高い群 (GC + PP +) が、ともに低い群 (GC - PP -) よりも得点が高かった ($g > a, b, e$; $h > a, b, e$; $p < 0.01$)。＜ソーシャルサポート(友人)＞では＜ギャング・チャム＞が高い群 (GC +) が低い群 (GC -) より得点が高いという傾向が示された ($e > a, c, d$; $f > a, b, c, d, g$; $h > a, d$; $p < 0.01$)

考察

1. ストレス反応について

仲間関係のプロフィールとして、高い＜ピア・プレッシャー＞を含む群は、「ストレス反応」(＜身体症状＞＜抑うつ・不安＞＜不機嫌・怒り＞＜無力感＞の4つの要因の総和)も押しなべて高くなっていることは、「ストレス反応」と＜ピア・プレッシャー＞の間に相関が見られたことから妥当である。仲間関係に不安を抱える中学生女子は、ストレス反応も高いことは、先行研究で述べられてきている知見とほぼ一致している。とくに＜ピア・プレッシャー＞だけが低い群 (＜ギャング・チャム＞と＜ピア＞は両方低い) よりも、＜ピア・プレッシャー＞と＜ギャング・チャム＞、＜ピア・プレッシャー＞と＜ピア＞が両方とも高い、あるいはそれら3つとも高い群のほうが、ストレス反応が高いことが見出された。

自立が達成される過程で「親密さ」(<ギャング・チャム>)と「同調圧力」(<ピア・プレッシャー>)が並存し表裏をなす性質をもつことが仲間関係の先行研究で示唆されたこと述べたが、ここでは、その特徴である「親密さ」と「同調圧力」がともに強く表れている中学生女子には、ストレス反応も高く生じることが示された。それとともに、むしろ「親密さ」よりも「異質性」(<ピア>)を仲間関係に希求しながら、「同調圧力」からも自由になっていない中学生女子のストレス反応も高いことが明らかになった。また「同調圧力」を強く感じているが、仲間との親密さや異質性を求める関わりから遠ざかっている者(仲間関係への消極的関与)に比べて、「同調圧力」を強く感じていながらも、仲間との親密さも、異質性もともに求めて関わっていく者(仲間関係への積極的関与の希求)のほうがストレス反応が強かったことから、「同調圧力」を同様に強く感じている者のうち、仲間関係への積極的関与を希求している者たちは、仲間関係へ消極的な関わりをする者たち以上に、アンビバレント(両価的)な葛藤状況にあり、さらなるストレスを招いたり、疲労・疲弊感を増大させる結果に繋がりやすいことが示唆された。このように「同調圧力」を強く感じながら、仲間との親密さや、異質性をも強く求める群に属する中学生女子は、仲間関係の中で多くを求め多くを悩み、「一緒にいて一体感を味わいたいけど、どう思われているか気になり自由になれない」「異なった個性の人たちと一緒にやりたいが、仲間はずれにされないかと不安でもある」といった抜け道のないストレス状況にあることが示唆されるであろう。

2. 学校ストレッサーについて

「学校ストレッサー」(<教員との関係><友人関係><学業関連>)の3つの学校ストレッサーの総和)が高いことと「ストレス反応」との間に相関が見られ、学校でこれらの要因で強くストレスを感じている場合、<身体症状><抑うつ・不安><不機嫌・怒り><無力感>の総和であるストレス反応も強く生じることが示唆された。

仲間関係のプロフィールとして、<ピア・プ

レッシャー>だけでなく<ギャング・チャム>や<ピア>もともに高い群が、学校生活でより多くのストレスを感じていることが示唆された。これら3つの値がどれもともに高いということは、この群は、友人関係に興味・関心・不安・困惑などの多くのエネルギーを費やしている状況にあるといえるであろう。そのような状況ではストレスを感知する閾値が下がることが考えられる。また、当然ながら友人関係が学校ストレッサーとして強く認識される可能性が十分にあるといえる。

3. ソーシャルサポート(友人)について

「ソーシャルサポート(友人)」と「ストレス反応」、「学校ストレッサー」との間には負の相関が見られ、仲間関係の8つの群間における「ソーシャルサポート(友人)」と、「ストレス反応」「学校ストレッサー」との変動を比較したとき、その変動に対照性が見られることは妥当な結果である。

友人からのサポート感について、仲間関係のプロフィールの各群から見ると、<ピア・プレッシャー>が低い群、つまり仲間関係の不安をあまり感じていない者は、友人からの「ソーシャルサポート」感が高くなる傾向にある。それに加えて特に<ギャング・チャム>が高い群は、つまり、仲間関係での「親密さ」を意識している者は、友人からのサポート感を強く感じられている。このことから、中学生女子の友人からのサポート感の源はやはり「親密さ」「同質性」を求める<ギャング・チャム>グループであることが示唆される。これまでの筆者らの研究から中学・高校と学年が進んでいくなかで、<ギャング・チャム>グループ優位の仲間関係から、徐々に<ピア>グループ優位の仲間関係へと移行していくことが見出されている。高校生を対象に分析を行えば、友人からのサポート源について、この中学生女子とは違った仲間関係による結果が得られるかもしれない。これも今後の課題である。

本研究により、中学生女子においても、友人から得られるサポート感がストレス緩衝要因になっていることがある程度示唆されたが、そのサポート感をより高く得るためには、「同調圧

力」や不安をあまり強く感じず、「親密さ」や「同質性」を得られる仲間関係が大切であることが示唆された。したがって、中学生女子に対する心理社会的援助サービスを考える際には、このような仲間関係における同調圧力や不安の軽減、温かく一体感のある仲間関係の醸成への援助が求められるであろう。前者の不安の軽減には、教員やカウンセラー、ボランティア相談員等によるこのような仲間関係の特徴を配慮した中学生女子への細やかな日常的・相談的対応が求められるであろうし、またピア・サポート活動などが根付くことによってもその効果が期待される。また後者の仲間関係の醸成には、温かい学級経営や構成的エンカウンター・グループなどによる人間関係作りの工夫、また部活動などでの一体感のある仲間関係作りなども期待される。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、対象が首都圏の私立女子中高一貫校の生徒に限られていることであり、また、一時点の横断調査研究に過ぎず、結果を単純に一般化することができないという点である。今後はデータをより広い範囲から集め、結果の信頼性を高めていく必要がある。特に共学の中学校を対象に調査を行い、性差について検討する必要がある。また、仲間関係はそのコホートによって特徴が異なると考えられるので、縦断調査を行い学年毎の変化について検討することも課題である。また、考察中で示したメンタルヘルスに及ぼす仲間関係の各特性間の影響や学校ストレスの閾値の問題についても今後の課題としたい。

結語

本研究では、中学生女子生徒のメンタルヘルスを＜ギャング・チャム＞、＜ピア・プレッシャー＞＜ピア＞という仲間関係の特性のプロフィールという視点から検討し、ストレス反応やストレス感は＜ピア・プレッシャー＞だけでなく＜ギャング・チャム＞や＜ピア＞の特性も併せ持っているほうが高いこと、友人からのサポート感の源は「親密さ」「同質性」を求める＜ギャング・チャム＞グループであることを示し

た。また、女子中学生への心理教育的援助サービスを考えるうえで、＜ピア・プレッシャー＞の軽減、＜ギャング・チャム＞グループの醸成という視点が重要であることを指摘した。

本研究は、対象が首都圏の私立女子中高一貫校の生徒に限られおり、また、一時点の横断調査研究であるという限界がありながらも、女子中学生の仲間関係とストレス反応、学校ストレス、友人からのソーシャルサポートとの関係を示し、中学生女子に対する心理社会的援助サービスを考える際の有益な示唆をもたらすものであると考える。

註) 本研究は、文部科学省科学研究費（基盤研究（C）（2）課題番号：13610157、研究代表者：黒沢幸子）の援助による調査研究の一部である。

文献

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化, 教育心理学研究, 47, 180-190
- 保坂亨 1996 子どもの仲間関係が育む親密さ——仲間関係における親密さといじめ, 現代のエスプリ, 353, 43-51
- 廣岡秀一・森田千恵子 2002 中学校のストレスとソーシャルサポートに関する研究—ソーシャルサポートの緩衝効果を中心に—, 三重大学教育学部研究紀要, 53, 167-178
- 伊藤亜矢子 2001 学級風土質問紙の臨床的妥当性検討の試み—学級編成時の生徒のメンタルヘルスが風土形成に与える影響を中心に—, コミュニティ心理学研究, 5 (1), 11-22
- 伊藤亜矢子 2003 スクールカウンセリングにおける学級風土アセスメントの利用—学級風土質問紙を用いたコンサルテーションの試み—, 心理臨床学研究, 21 (2), 179-190
- 加藤星花・栗田広 1999 中学生におけるストレス反応としての抑うつ状態と対人サポートとの関連, こころの健康, 14, 68-75
- 黒沢幸子 2004a “仲良しグループ” “完全主義” が壊れるとき <緊急企画; 佐世保小6同級生殺害事件を考える—思春期の子ど

- もの心理>。児童心理, 58 (11), 1-6
- 黒沢幸子 2004b 思春期の女の子の葛藤は、小学6年生でピークをむかえる <“女の子の危うさ”をどう理解する?—前思春期、思春期世代の危機管理>。総合教育技術, 59 (9), 74-75
- 黒沢幸子・有本和晃・斉藤香織・森俊夫 2004 中学生の仲間関係、及び心理的発達とメンタルヘルスに関する縦断的研究。目白大学人間社会学部紀要, 4, 15-27
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫 2003 仲間関係発達尺度の開発—ギャング、チャム、ピア・グループの概念にそって—。目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33
- 黒沢幸子・森俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子 2003 「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発—スクールカウンセリング包括的評価尺度(生徒版)の開発の一環として—。(財)安田生命社会事業団研究助成論文集, 38, 38-47
- 黒沢幸子・森俊夫・有本和晃・久保田友子・古谷智美・寺崎馨章 2001 スクールカウンセリング・システム構築のための包括的ニーズ調査(その1)—教職員用包括的ニーズ調査尺度 CAN-SCS (T-version) の信頼性と妥当性—。目白大学人間社会学部紀要, 創刊号, 11-25
- 黒沢幸子・森俊夫・有本和晃・中西三春 2002 スクールカウンセリング・システム構築のための包括的ニーズ調査(その2)—保護者用包括的ニーズ調査尺度 CAN-SCS (P-version) の信頼性と妥当性—。目白大学人間社会学部紀要, 2, 11-25
- 岡田佳子 2002 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての検討—。教育心理学研究, 50, 193-203
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果。教育心理学研究, 41, 302-312
- 岡安孝弘・高山巖 1999 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成。宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 73-84
- 岡安孝弘・高山巖 2000 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス。教育心理学研究, 48, 410-421
- Stocker, C. M. 1994 Children's perceptions of relationships with siblings, friends, and mothers: Compensatory processes and links with adjustment. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 35, 1447-1459
- 高山巖(代表) 2000 小・中・高等学校におけるいじめおよび学校不適応防止対策プログラムの開発。文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究(B)(2) 09410035
- Wasserstein, S.B. & LaGreca, A.M. 1996 Can peer support buffer against behavioral consequences of parental discord? *Journal of Clinical Child Psychology*, 25, 177-182

The Correlation between the interpersonal relationship with friends and stress related variables in Junior high school female students

Sachiko Kurosawa Mejiro University, Faculty of Human and Social Sciences

Kazuteru Arimoto KIDS Counseling System

Toshio Mori Graduate School of Medicine, the University of Tokyo

Mejiro Journal of Psychology, 2005 vol.1

Abstract

The purpose of the present study was to examine the correlation between the feature of interpersonal relationship with friends and stress related variables such as stress responses, stressors, and social support in junior high school female students and to suggest their stress moderators. The subjects of this study are 1419 students from 1st to 3rd grades of 4 private girls' junior high schools in Tokyo. The results showed that the students experienced much more stressors at the school life and stress responses were higher when they had both the desire for intimacy and homogeneousness with their friends and the desire for heterogeneousness with them than when they only were in anxiety for their friendship. Also, the results showed that students who were not in anxiety for their friendship but had intimacy with their friends tended to recognize social support from their friends. It is suggested that in designing much more appropriate psychoeducational service for junior high school female students, it is important to reduce peer pressure and anxiety for their friendship and to develop warmheartedness and a feeling of identification with their friends.

Key word : Junior high school female students, interpersonal relationship with members, stress response, social support